

日本の大学生の授業積極性について —日米大学比較による考察—

1355089 永井優希 指導教員 藤掛洋子

【背景・目的】

筆者がアメリカの大学に1年間留学した中で、授業中の学生の積極性や大学施設、制度において日米で大きな差が見られた。これらの違いは何に起因するものなのか興味を抱いた。これを明らかにすることで、多少なりとも今後の日本の大学生の授業積極性を高めることに寄与できるのではないかと考える。

【方法】

主な方法としては、日米比較に関する様々な資料の文献調査であり、そのうえで実際に現地の友人に対しインタビューを行い、アメリカの大学生の現状について調べた。さらに自身の経験をもとに、日米大学比較を行い、そこからどういった結果が導き出せるか考察した。

【結果・考察】

<第1章>日米大学比較対象としての日本
日本の大学生が、いかに勉強に積極的でなく、授業に積極的でないかという現状は、様々な調査結果から明らかになった。

また、日本社会全体的に、大学の授業成績に対する信頼感の希薄さから、企業と学生と教員の間で「負のスパイラル」(辻, 2013)が起きていると指摘できる。さらに、大学入学までの進路指導が、大学入学を目的としたものであり、勉強の意義、大学進学の意味について大学入学までにきちんと考える機会が少ないことも、入学後の勉強に対する姿勢に影響を与えることも分かった。

さらに、教員側の事情としては、授業熱心な教員も研究熱心な教員も、根本的には事務作業の多さゆえに授業準備に充てる時間が少なく、結果として学生にとって面白い授業を作れない現状があった。

<第2章>日米大学比較対象としてのメ
リカ

インタビューによると、アメリカの大学生は大学院進学であれ就職であれ、「自分の将来のために」勉強に励んでいることが分かった。また、高い授業料も関係するかと

考えていたが、これについては公立私立によっても差が大きく、また奨学金制度も豊富であることから一概には言えないことがわかった。

<第3章>本学とSDSUの事例研究

本章では、本学とSDSUのシラバスを比較した結果、シラバスの存在意義が両国間で異なることから大差が見られなかった。次に大学施設や制度面で比較した結果、どちらも日米で重視されるべき事項が異なるため、比較の意味をなさないことがわかった。

したがって、日米の授業積極性の差異は、大学だけの問題だけではなく、文化的側面の違いが大きく関係していると指摘できる。

<考察>

当初は、本学とSDSUとの間で比較分析を行うことで、なんらかの違いが見え、その違いが授業積極性に関係してくるのではないかと考えていた。しかし実際に比較分析を行ってみると、根本的には大学入学以前の問題や文化的側面の違いであることがわかった。

【結論】

日本の大学生の授業積極性の低さについては、受験や就職活動など、日本特有の文化的側面の影響が強いためであると考えられる。

また、日本においては、大学入学まで講義形式の授業が大半であり、それまで受動的に受けてきた授業に対し、入学後指導なしに能動的になりづらいのではないかと考えることができる。現在、文部科学省により「アクティブラーニング」が推奨されている。このアクティブラーニングが小学時から定着し、大学入学までに授業に対し能動姿勢が当然のものとなれば、大学の授業積極性についても何らかの変化があるのではないかと期待できる。

その点の考察については、今後の研究に期待するものとする。